

第91号

1984年5月25日

内容

現代指導者論をめぐって……1~2
 第127回大学共同セミナー……2~5
 昭和58年度教育プログラム白書4~5
 法人ニュース……6
 千人会……6
 昭和58年度業務白書……7
 事業部だより……8~9
 わたしたちの合宿……9
 利用状況……9~10
 告知板……10



発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉

東京都八王子市下柚木(●192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 5-74590番

編集

大学セミナー・ハウス

企画室

編集人 中川秀哉

発行人 吉川孔敏

製作 中央公論事業出版

今回のセミナーに参加して、私は心身に快い刺激を受け、学生にかえったような気持ちで楽しい三日間を過ごすことができました。大学セミナー・ハウスが大変よい機能を果たしていることを実感するとともに、私の学生時代と比べて皆さんの恵まれた環境をうらやましく思ったことでした。

さて、閉講に当たって、私は、ただいまの皆さんの討論に出ていた論点に答えるつもりで、いくつかのことを申し述べたいと思います。

まずはじめに、社会には安定期と変動期があり、革命や戦争はその極限状況であるとは私には考えませんが、そのことは、安定期には指導者を必要としないという意味ではなく、戦後の政治家を見れば明らかのように、利益調整型ないし利益誘導型の指導者が要求され、強力なリーダーシップが発揮されない、ということでありませぬ。なぜなら安定した社会では、全体の運命に関わるような問題をそれほど深刻に考えなくてすむからです。

では、現在は安定期なのだろうか、それとも変動期なのだろうか。戦後三九年という歳月は、ちょうど明治維新から日露戦争までの期間に等しい。明治日本は、日露戦争によって極東における国際的地位と名誉ある独立国家としての安定した地位を確保するとともに、進んだ途端に、実は破滅への道を歩み出したのでした。軍部と外務省との二元外交が始まり、言論は次々と抑えられ、日本は統一国家としての意志を形成できなくなっていくまです。そして

「ロシアの脅威」があったとはいえ満鉄の権益を獲得し、日韓併合という暴挙を犯すことによって、日本は大陸と関わり、中国人や満州人や朝鮮人に対して、自ら帝国主義的な行動をとったのであります。

現在の日本は、OECD加盟国として国際社会に認められ、ヨーロッパを追い越し、アメリカと新技術を競うまでになった。かつて列強に伍した軍事大国としての地位を獲得したと同時に己惚れが始まったように、現在の日本人は、経済大国としての地位に己惚れてはいないだろうか。私がこのセミ

第127回大学共同セミナー
 閉講コメントより

現代指導者論をめぐって

——明治日本と戦後日本——



評論家、『中央公論』元編集長

粕谷 一 希

な時期にある一方で、自由を失い、徐々に矛盾が増大していきま。企業社会を例にとると、大規模組織の中にあつては人間は停滞的にならざるを得ない半面、エレクトロニクスや半導体などの分野では激烈な競争を展開している。戦後三十年の間に、五年とその地位を確保した企業はありませんが、現在の変化は、さらに加速度的であります。

最後に、大衆社会について言及して、私の話をしめくりたいと思います。私は、この世の中に大衆は実在しないと思つています。人は誰でも人生の主役です。人間同士が互いの顔が見える関係をつくっていけば、大衆などというものはない。大衆消費、大衆伝達の社会では、われわれは一票の選挙権しか行使できない顔のない大衆であります。しかし大衆というのは現象であつて、実態ではないのです。例えば、大講義室で一人の教師に相対するとき、皆さんは大衆になつてしまつて、このセミナー・ハウスではお互いに名前を覚え、教師に自分の疑問をぶつけることもできます。

ナリの演習で、勝海舟、小村寿太郎、吉田茂という歴史的指導者を取り上げたのは、極限状況にあつて判断を誤らなかつた政治家として、多くの示唆をわれわれに与えてくれていると考えたからであり、ますが、かれらを通して私がいちばん言いたかつたことは、日露戦争が近代日本の分水嶺であると同様に、戦後日本の分水嶺が今、始まつている、ということでありま

たところで現代社会は、安定と変動が共存している点に、その特質があるといえましよう。経済界でも政界でも、組織は固定し安定的

それでは、現在の日本にとってどのような指導者が望ましいのだろうか。政治指導者の最大の任務は、いうまでもなく国民の安全と繁栄であります。現代の世界で完

(次ページ5段めへつづく)

第127回大学共同セミナー

主題Ⅱ 現代指導者論——その人格と時代精神——

期日——84年3月16・18日

Ⅰ 全体講義

政治指導と政治家—力の論理を超えて—

神島二郎氏

立教大学教授

志士仁人と生神様—小泉八雲の「稲むらの火」をめぐる—

平川祐弘氏

東京大学教授

経営者が考えること・経営者を心配すること

山口比呂志氏

雑誌『財界』主幹

ハセクシオン演習

明治日本と戦後日本—勝海舟・小村寿太郎・吉田茂を通して—

評論家 雑誌『中央公論』元編集長

日本政治の政治家像

稲谷一希氏

法政大学教授、元共同通信論説委員長

内田健三氏

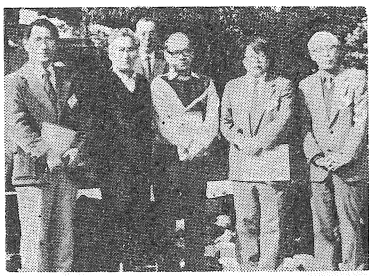
政治的人間学

岡野加穂留氏

明治大学教授

小田 晋氏

筑波大学教授



左より平川、内田、吉川、稲谷、小田、飯田の諸氏

明治大学教授 岡野加穂留氏

筑波大学教授 小田 晋氏

参加学生 42名(内女子7名)

明大(6)、東大(4)、法大、東京女子大(各3)、筑波大、東京外大、中大、早大、産業能率大(各2)、東京農工大、一橋大、東京都立大、学習院大、ICU、聖心女子大、専修大、東洋大、和光大(各1)、その他(7) 合計18校

Ⅱ 運営委員

今日の世界は「指導者不在」の時代といわれる。それは、現在の社会が大動乱の時代ではなく、一見、平和な小康状態にあり、強力なリーダーシップを発揮する人物を必要としなことを示しているのかも知れない。しかし、高度に組織化され、管理化された現代社会にあっても、重要な地位を占める少数の人物の人格や決定がその人間集団全体の運命を左右することもある。

とりわけ、危機的状況においては、平穏な時代には鑑定されていた精神病質者が、逆にわれわれを支配するといった恐るべき事態も起こってくる。戦後政治の総決算が唱えられる中で、指導者のあるべき姿を探ることは誤った指導者を生み出さないためにも、また新時代を担う指導者の条件を探る上にも極めて重要な課題である。指導者の精神構造と現代社会の問題が、共同セミナー委員会に提

案されたのは、昨年の3月のことである。発案者である精神医学の小田晋委員のほかに、政治学の岡野加穂留委員が企画に参画され、一年後に実現の運びとなった。歴史や経済といった側面からのアプローチも加えつつ、複眼的な視野から今日の指導者像を描き出すべく、ジャーナリズム界出身の稲谷一希、内田健三の両氏を指導教授として迎えた。

◇

プログラムの開講式に続き、神島二郎氏による全体講義Ⅰから始められた。話の冒頭で氏は「なぜ学問をするのか」と聴衆に問いかけられ、政治学を志す者の研究態度の在り方の大切さを次のように強調された。

政治学に携わる者は、「学んだことを何のために使うのかを常に考えなければならぬ。自分はどういう姿勢で研究に取り組んだかが、やった研究の中に反映されている。初めから負けるかわかっていて戦争を日本がなげやってしまったのか、再び同じ過ちを繰り返さないためにも、的確に掴んでみたかったからだ。私は、学問は現在自分の任んでいる社会をよりよいものにするためにやるものだと思っ

話の要約を報告する。▼民衆の政治生活の営み方と彼らが生み出すリーダーの性格とは、表と裏の関係にある。指導者を考えることは、同時にその背景にある政治社会を考えることである。よりよい指導者を選びとるためには、政治の当局者ではない一般市民が、自分たちの日常生活の中で政治を見る時の批判的な見識を不断に養うことが大事である(稲谷一希氏)。

▼長年の政治記者としての経験によれば、戦後日本の政治指導者は総じて「和」の政治家であった。彼らは戦後の短期的な政治の仕組みの中から生まれたばかりでなく、農耕民族にまで遡りうる日本の長い歴史的正な政治風土が生んだものである。日本の政治指導者の移り変わりをみると、リーダー自身より彼らを生み出していった日本国民の知恵や順応の巧みさを感じられる(内田健三氏)。

▼各国の政治指導者について考えさせられることは、日本には言葉本来の意味でのデモクラシー(Democracy)人民(Praxis)権力)がなく、また、それを支える精神的基盤もないということである。ヨーロッパのデモクラシーをそのままの形で日本にあてはめるのではなく、日本の伝統的文化の中に置き直し、日本独自のものとして育て上げてゆく努力が必要である(岡野加穂留氏)。

▼精神科医の実際の経験から言えば、正常と異常との区別をつけるのは非常に難しい。優れたリーダーの中には、若干の狂気の「スペース」を持っている人が多い。さまざまなリーダーの中でも、特に

(前ページよりつづく)も理想社会へ導く道があります。何も政治家にならなくてもよい。志のある人たちが一〇人集まったら、その中から自然にリーダーが出てきます。危機的状況が進行すると、たった一〇人のグループが突然、歴史の表面に浮かび上がってくる。歴史とはそのようなものであります。危機的状況に際会するかどうか、それは運命でありませんが、それが人間と歴史の間の乖離であり、また出会いでもある。(文責・編集者)

宗教的リーダーのもつ影響力は大きく、最近では芸能やスポーツ関係のリーダーの果たす役割が大きくなってきている(小田晋氏)。

最後に司会の小田氏の要請で、各氏がそれぞれの吉田茂論を披露した後、各セミナー室に分かれてセッション演習に入った。

◇

二日目の午後は、平川祐弘氏による全体講義Ⅱ、山口比呂志氏のゲスト講演および飯田宗一郎名誉館長による講話が配された。平川氏は、昭和一〇年代の小学校の国語教科書に載った「稲むらの火」を題材にして、その話の原作であるラフカディオ・ハーンの英文、モデルとなった浜口梧陵の日記を比較文学的手法を駆使して分析された。稲むらに火を放ち、自らの財産を犠牲にしても、村人を津波から救った志士仁人としての村の指導者の姿を、氏は講堂いっぱいに響き渡るような朗朗たる声で描き出された。日本の民衆の間に伝えられた素朴な村の指導者の在り方は、指導者のあるべき一つ

の姿を浮彫りにし、聴衆一同に深い感動を与えることとなった。交友館でお茶を飲みながら歓談した後、雑誌「財界」の主幹として活躍されている山口氏が、現代日本の経済界を動かしている人々の思考方法を実話を通して紹介された。氏の「生ま生まし」話は、学生の立場からは触れることのできない実社会の現実を垣間見

【講話要旨】

私の指導者論

大学セミナー・ハウス
名誉館長 飯田宗一郎

身の廻りにあって絶えず変化するものに右往左往するのが、われわれの常であります。このことをゲートは『ファウスト』で悪魔と神との戦いとして描きました。そして神に導かれる者の勝利をうたい上げました。

私は二五年前、当時の早大総長の大浜信泉先生に、「定員以上の学生を入学させ、学生が教室に入り切らないで廊下に立っているようなことが大学で平然と行なわれているのはおかしい」といったことがあります。学問をするには、そこに原則がなければならぬ。不合理な状況を前にして誰もやらないならば、私は自分の知と勇氣のありったけを出してセミナー・ハウスを創ろうと思いました。勉強したい学生と、教えることが自分の大事な任務だと自覚している教授がいれば、本当の意味での大学教育が行なわれるに違いない。泊りがけでセミナーをする教授は少ないかも知れないが、しか

させることになった。最後に、飯田宗一郎氏(要旨別掲)の講話をもって、午後の講演は締めくくられ、夜のセクション演習へと引き継がれた。

最終日は、9時半からセミナーの総括として全体集会が開かれた。レポーターによって、各セクションの演習内容が報告された。そして、全然ないはずはない。そのように考えて私は冒険にも等しいセミナー・ハウスづくりに着手したのである。

さて、われわれが現在に生きていくことは、同時にわれわれには過去の歴史があるということである。だから、あなた方は歴史の中に鎌を深く下ろしなさい。思想性のある生活をしなさい。われわれは一つ一つの行動に思想を持つ必要があると思うのです。真理の前に立つとき、教師も学生も平等であることを形の上で現わすために、私はこの講堂には特に演壇を置かなかったのです。

将来に向かって日本をどのような国にしようとするか、どのような大学にしようとするか。われわれはそこで夢を持ちます。知性を高め、思想しながら、夢を持つ能力を養わなければなりません。その時大事なことは、創造的な企画をいかにして現実に変換させるか、ということであり、専門的知識も必要だし、総合的教養も、そして健康も必要です。また、民主主義社会が健全な発達を遂げるためには指導者が必要であります。指導者であるからには、自分の頭で考えたことを社会にぶ

後、「指導者とその時代」をめぐって、セクションを交叉する形で活発な議論が正午まで続けられました。

「リーダーは時代に拘束されるか、あるいは時代を超えられるか」という問いかけに對するある学生の次の呼びかけは、このセミナーで学生たちが掴みとったことを端的に表わしている。「時代を

つけてみる。責任の度合いが違うことを自覚すべきです。金融論の知識だけでなくして、文化がわがり思想のある銀行家ならば、丘を削って乱開発をする不動産屋に融資はしないに違いない。自然を守るためには、指導者の側に倫理を求めなければならぬのです。

現代は生涯学習の時代に向かっています。そのとき三輪(さんりん)学苑の構想が浮かびました。いま、私はその実現に努力中です。三輪は般若經の教える三輪清浄ということばから来ています。施者と受者と施物の三者は清らかでなければならぬという意味です。アメリカの硬貨には「Trust in God」とあります。聖書に「与えるは受くるより幸いなり」とあります。それに触れるとき、人間は幸わせを感じます。と、いって、人間社会の経済生活を離れて空想的になりなさい、と私はいつてもおちろの方ばかり見ていると、「みんなで渡れば恐くない」式の話になってしまふ。されど私は渡らな

い、という人間がいなければならぬ。そういう意味で、私はいつても他の人と別の道を歩むことを心がけています。(文責・編集者)

構成しているのは、その時代の人々、すなわち「われわれ」自身である。われわれが、ふさわしい環境作りをした上で初めて、卓抜したリーダーが生み出されるのではないか。歴史がいったん動き出すと、われわれの手の届かないところへ行ってしまう。望まれる指導者を生み出すためにも、一人一人が意識の向上をはかり、その土壌作りをしようではないか。

不透明で予見したい時代であるからこそ、安易な指導者待望論は、敵として戒められねばならない。しかし、それだけに民主主義を標榜する社会においては、一人一人の市民に課せられた責任は重いのである。

閉講にあたっての粕谷氏の話(フロントページに掲載)にもある通り、現代社会においても、われわれが有機的な繋がりを着実に確保してゆくならば、その時「顔のない大衆」としてではなく、自覚的な主体として社会を作り変えてゆくことも不可能ではない。今、将来リーダーになるべき人の徳(virtue)を涵養するための教育システムの確立が求められて(小田氏)。その意味でも、それぞれの分野で明日の日本を拓くであろう「潜在的リーダー」たちが、こうして一ヵ所に集い、共通の経験を持ったことの意味は極めて大きかったといわねばならぬ。

「器」と「生きざま」
中央大学法学部四年 宇野沢英治
ぼくは「発展途上人」であって、指導者に対する確固たる考

を持っていない。しかし、セミナーに参加してから、こんなことを考えている。リーダーの人格や力量(うづま)は、苦しい時にこそ、その真価を発揮しなければならぬ。そして、苦しみや危機という人生の真剣勝負の中でしか、器は育たない、と。

要するに、危機のとき、苦しいとき、器の本質はあきらかになる。平時のときは卓越しているように見えても、いざという時に、力不足を露呈し、器の底が見えてしまつては何んにもならない。危機の時代、苦しい時代であるからこそ、自己献身を示して尊敬と信頼を勝ち取るヤツ、主張すべきところは主張し、譲るべきところは譲るべきよく譲る冷静な決断力と行動力を持つヤツ、そして、先見の明をもつメンパーに夢を与えるヤツが器の大きい人物と言える。

むろん、天性のものが大きいのだろうが、こればかりはそうもゆくまい。やはり、器のあり方は一人一人の「生きざま」にかかっていける。いかに生きるかは自分で見つけるほかない。

教年前、こんな新聞記事を目にした。
「日本の経済・産業界(大企業だけでなく中小企業をも含めて)のトップの経歴を調べてみると、三つの特徴が浮び上がってくる。第一は、大柄の経験があること。第二は、早く親の失ったこと。第三は、地方の国立大出身であること」
それぞれ的人生における真剣勝負 (5 ページ 4 段めへつづく)

昭和58年度 教育プログラム白書

昭和58年度は、表1にあるように大学共同セミナー(五回)、大学院共同セミナー(一回)、大学合同セミナー(一回)、国際学生セミナー(一回)、大学教員懇談会(一回)を実施した。総合計九回が、当ハウスの開催した教育プログラムの全容である。

表2-①②③は、学生を対象としているプログラム計八回分の参加状況をそれぞれ大学別、学科別、学年別にみたものである。したがって大学教員懇談会は算入していない。

まず、参加者総数は表2-①にみるように四六〇名を数え、総合計八回で同数の前年度より一七八名減少した。

大学のゼミを主体とした参加形態をとる大学合同セミナーと、個人参加の他のプログラムとを区別するため、表中、大学合同セミナーの参加者を()内に示した。因みに大学共同セミナーについてみれば、五回分の合計は二六八名で、各回の参加人員は表1に示されているように最少三六名から最多七八名の幅がある。各回平均五三・六人は前年度(五五・三人)よりさらに下回る

結果となっており、募集人員七〇名を念頭に置いた定型の企画に、若干の工夫と検討が必要なることを示している。

参加者の多い上位の大学は、明治大(36)、東大(35)、中大(34)、日本女大(33)、東京外大(24)、ICU(24)で、大学合同セミナーを除いた場合の順序は、東大、日本女大、東京外大、ICU、早大(20)、筑波大(16)となる。男女の比率は五八対四二で、男子が女子をやや上廻った。

表2-②で専攻分野をみると、自然科学に関するテーマが一度も取り上げられなかったため、社会科学系、人文科学系がほぼ同率で高く、自然科学系が10%を大きく割って6%にとどまった。

また表2-③をみると、例年どおり三年生が最も多く、全体の三五・七%を占めている。教養課程(一、二年生)と専門課程(三年生以上)に分けると、前者は二二・五%と少なく、圧倒的に高学年に集中していることがわかる。

なお、社会人が四一名を数え、全体の八・九%を占めている。前年度二四名より大幅に増加しているのが目立つところである。

<表1> 昭和58年度 教育プログラム開催状況

▶大学共同セミナー

| 回数 | 期間 | 主 題 | 指 導 教 授 名 | 参加人員 |
|--------------|--------------------|---|---|--------------|
| 第123回 (1) | 昭和58年 5月28日～29日 | 平和・婦人・学問 —現代人へのメッセージ— (故上代たの先生追悼記念) | 石田雄、一番ヶ瀬康子、福田陸太郎、*熊坂敦子、井出義光、(徳末愛子) | 70名 (24校) |
| 第124回 (2) | 11月25日～27日 | 芸術のたのしみ —バロック概念の再検討— | 遠山一行、若桑みどり、辻惟雄、船山信子、*徳丸吉彦、渡邊順生、渡邊慶子、平尾雅子、M・ワッセルマン | 36名 (18校) |
| 第125回 (3) | 12月16日～18日 | 第三世界の文化状況 —人間の解放とアイデンティティの模索— | *板垣雄三、李恢成、海老坂武、*栗原幸夫、加藤祐三、クントン・インタラタイ、*深海博明、楠原彰、加茂雄三、ルティエー・広河、針生一郎、ハムザ・アッディーン | 78名 (25校) |
| 第126回 (4) | 昭和59年 1月14日～15日 | 人間性の回復を求めて —現代における救いの問題— | 佐古純一郎、谷口龍男、小泉仰、*峰島旭雄、藤井正雄 | 45名 (25校) |
| 第127回 (5) | 3月16日～18日 | 現代指導者論 —その人格と時代精神— | 神島二郎、平川祐弘、山口比呂志、粕谷一希、内田健三、*岡野加穂留、*小田晋 | 39名 (18校) |

▶大学院共同セミナー

| | | | | |
|-----|------------------|------------------------------------|---------------------------------------|--------------|
| 第4回 | 昭和58年 7月1日～3日 | ヘブライズムとヘレニズム —合理性と非合理性の問題をめぐって— | 並木浩一、川島重成、絹川正吉、荒井献、川田殖、(中川秀恭)、(阿久津喜弘) | 37名 (19校) |
|-----|------------------|------------------------------------|---------------------------------------|--------------|

▶大学合同セミナー

| | | | | |
|-----|---------------------|--------------------------------------|----------------------------|-------------|
| 第6回 | 昭和58年 11月11日～13日 | 近代の経済および経営思想の生成 —イギリス・アメリカ・日本の場合— | 長幸男、*田村光三、寿永欣三郎、*山下幸夫、岡山礼子 | 65名 (4校) |
|-----|---------------------|--------------------------------------|----------------------------|-------------|

▶国際学生セミナー

| | | | | |
|------|---------------------|----------------------------|---|--------------|
| 第10回 | 昭和58年 10月28日～30日 | 発展と平和のモデルを求めて —環太平洋の課題— | 高坂正堯、ジョン・ウェルフィーールド、鈴木一郎、齋藤志郎、渡辺昭夫、*山沢逸平、*浜西栄一、*阿部美哉、神谷弘司、鈴木信一、青柳真智子、高山純、(菊地靖) | 87名 (27校) |
|------|---------------------|----------------------------|---|--------------|

▶大学教員懇談会

| | | | | |
|------|-------------------|----------------|---|-------------------------------|
| 第20回 | 昭和58年 10月8日～9日 | 時代の変遷に伴う大学の将来像 | 黒羽亮一、坂元弘直、木内信敬、示村悦二郎、関口研日麿、石川光男、(尾田幸男)、(水島義治)、(根岸愛子)、(蠟山道雄) | 68名 (34校) (運営委員、聴講者を含む) |
|------|-------------------|----------------|---|-------------------------------|

*印は運営委員を兼ねた指導教授
()内は運営委員

〈表2〉昭和58年度 教育プログラム参加状況

(計8回：第123～127回大学共同セミナー、第4回大学院共同セミナー、第6回大学合同セミナー、第10回国際学生セミナー)

② 学科別参加者数

Table with columns for gender (男, 女), total count (合計), and percentage (比率%). Rows include various disciplines like 文学部, 教育学, 法学部, etc.

① 大学別参加者数

Table with columns for university district (大学区分), gender (男, 女), total count (計), and percentage (比率%). Rows list various universities like 筑波大学, 東京大学, etc.

③ 学年別参加者数

Table with columns for district (区分), gender (男, 女), total count (計), and percentage (比率%). Rows represent different years from 1 to 4.

*外国人で学年の不明な者

() は内数で大学合同セミナー参加者

「3ページよりつづく」
負、言いかえれば、先にあげたような「修羅場」を通り抜けてはじめて、器は本物になるのではないか。すぐれた知識も、修羅場をへて本当の自分にとっての知恵となるのではないか。付け焼き刃はダメである。

生きたまは多様であるが、その多様性の根底にはよく生きるための基調が求められる。名譽館長の「思想ある生き方」や神島先生の「傍観者にならない生き方」のように誠実で真摯な生きさまが。
今、ほくは大学四年というターニング・ポイントにいる。セミナーでの体験は生きさまを考え直す機会となったようだ。自らの器の軽重はともかく、誠実な生きさまをもって、真剣勝負してゆきたい。

心に残った指導者像
東京外語大外国語学部三年
新井 純子
日頃から政治や時事問題には全く疎く、政治学という分野についてもほとんど何も知らなかったのはあるが、明治維新から日露戦争の頃の日本に興味を持っていて、私は、当時の指導者像にふれてみたいと思ひ、今回のセミナーに参加した。

「自由」と「必然」の間に「偶然」があり、その「偶然」には様々な幅の選択の余地があるのであり、そこで何を選ぶかという主体の意志に責任があるとおっしゃりたいと思う。このことは指導の立場にある人間はもちろんなこと、私たち一人一人が日常生活においても心にとめておくべきことではなからうか。
有意義でとても刺激になった三日間であった。

政治家だけでなく、教師や宗教人、企業家など実に様々な指導者がいる。そこに共通して求められるのは、人格と、私利にとらわれずに、ひきいられていく側の要求を敏感にとらえて、時代の流れの中で最善の方向へと導いていくことのできる能力ではないだろうか。

平川祐弘先生が、ラフカディオ・ハーンの「稲むらの火」を題材に話して下さった、志士仁人としての村の指導者像も心に残っている。ハーンは神道の生神様に心を寄せてこの作品を書いたという。素朴さとなにか異様ともいえる不思議な雰囲気を感じた話であったが、指導者五兵衛のもつ直感的確かな判断につづく対処の仕方には、指導者としての資質というものを考えさせられた。

に息をととのえて、常に自己の精神を厳しく見つめていた。私などは、読み進みながら、小村の意識を通して伝わってくる交渉の緊張と迫力にただただ息をのんでいるのみであった。小村は戦国時代の武将のような指導者の一つの型に思えた。

法人ニュース

第56回理事会

第37回評議員会

'84年3月23日/銀行倶楽部

出席者

△理事 中川秀恭、飯田宗一郎、平野龍一、三宅彰、鈴木皇、吉川孔敏、小山五郎(代理星野欣也)
△評議員 中村哲、木下是雄、川原栄峰、岡宏子

△評議員七〇名 (敬称略)
委任状による者 理事一五名、評議員七〇名

理事会・評議員会合同会議は、中川理事長が議長となり議事に入る。吉川専務理事より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答のち、各案件を承認可決した。

評議員人事案について

学長交代、会員校の加入・脱退等により、青山学院大学長鶴沢昌和、武蔵大学長浅羽二郎、法政大学学長青木宗也、上智大学長橋口倫介、東京経済大学学長渡辺渡、国際基督教大学学長渡辺保男、東京都立商科短期大学長小川幸一、三越社長市原規、京王帝都電鉄社長箕輪圓の諸氏の新任。保坂栄一、岡茂男、豊口隆太郎、柳瀬陸男、渡辺輝雄の諸氏の退任。

役員人事案について

協力会員校の総長新任に伴う法政大学総長青木宗也氏の理事就任。

協力会員校の脱退について

相模女子大学および東洋大学の退退。

▽準協力会員校の加入について
東京都立商科短期大学、東京都立川短期大学および東京都立工科大学の加入。

▽昭和59年度事業計画案について
(1)利用予定人員を五万四、〇〇〇人とする。

(2)利用料金は据え置く。

(3)開館20周年記念事業計画原案の具体的な検討と、その準備に着手する。また募金委員会を設置し、募金活動を開始する。

▽昭和59年度収支予算案について
この案件は、昭和58年度決算報告とともに、次号に掲載する。

開館20周年記念事業について

開館20周年記念事業募金委員会を設置するに当たり、募金委員会内規案と募金委員会委員名簿案が検討され、両案とも決定。なお本内規は'84年3月23日から実施、また事業計画の決定次第、委員を委嘱し委員会を発足させることになった。

▽その他
飯田名誉館長に対する職務につき前年度に引き続き59年度も委嘱する。

運営委員会

第10回 '84年2月7日/当ハウス

第11回 '84年3月12日/大隈会館

記念事業特別委員会

第2回 '84年2月13日/銀行倶楽部

第3回 '84年3月19日/当ハウス

昭和58年度第3回共同セミナー委員会

'84年3月9日 東京ガーデンパレス

△出席者 岡宏子、黒田道雄、板垣雄三、岡野加穂留、小田晋、峰島旭雄、尾本恵市、深海博明、戸沼幸市、山下幸夫、青柳清孝、池上嘉彦、栗原彬、杉田弘子

上嘉彦、栗原彬、杉田弘子
今回は別記一四名の委員が出席され、ハウス側から中川館長、飯田名誉館長ほか関係のスタッフが陪席して開催された。

議事はまず、昭和58年度プログラムについて、第124回~126回大学共同セミナー、第6回大学合同セミナーの実施報告および第127回の準備報告が担当の運営委員から行なわれた。とくに第125回「第三世界の文化状況」について深海委員から、この企画のユニークさは日本アジア・アフリカ作家会議の全面的協力を得た点にあるという報告があり、これを受けて、今後の共同セミナーの企画にもこのような工夫が必要ではないかという意見が出された。

次に昭和59年度プログラムに移り、すでに企画が進行中の第128回~130回大学共同セミナー、第5回大学院共同セミナーについて準備

状況が各運営委員より報告され、これをめぐってテーマや講師についての意見が種々出された。続いて第131回の企画について協議を行ない、栗原委員の担当で「管理社会」をテーマとすることを決定した。

次に、岡委員長より、開館20周年を記念する共同セミナーの企画が、共同セミナー委員会に正式に委託された旨の報告があり、委員各位に協力要請がなされた。また委員長提案として、近年の共同セミナー参加者の減少傾向に対応した募集方法の見直し、検討が協議され、企画室主事から募集方法の現況について説明があった。

これを受けて、情報社会における価値の問題、現代の学生の意識と行動などをめぐって種々の意見が各委員より出され、事実認識に立った議論の重要さと、共同セミナーに積極的価値を付与しつづけていくことの意義を再確認した。

千人会

'84年2~3月

現在会員は一、七〇〇名です

大学人II 一、二七二名
社会人II 四二八名
◇新しく会員となられた方々
3名(第73回報告(申込順))

明の星学園事務職員

C 山田 誠 殿
C 関ジエイ・エム・アル東京 多田 隆 殿

三菱商事株式会社

C 三菱商事株式会社 松田 豊弘 殿
◇会費ありがとうございます
原増司、小林清子、山田圭一、谷資信、金子ハルオ、仙田哲、岩佐

凱実、田村康男、中利太郎、中村孝之、福田敦夫、藤巻正生、板橋並治、平岡伊佐武、遠藤平治、高橋潤二郎、小谷友紀子、加藤信明、箱木真澄、相原光、石井正博、川崎正三、牧野誠一、木村増三、東洋、矢田俊文、高村新一、富沢賢治、原正彦、永島孝、勢山秀子、箕輪成男、井村君江、大岡信、今井裕之、西田貴子、鐘ヶ江信光、中岡二郎、大野京子、猪瀬雄、本間仁、松島千代野、尾田幸雄、斎藤千秋、飯田芳男、平川紀一、井原恵治、岡村勝、原田敬一、小泉

仰、福永寿己夫、佐藤美喜子、本谷勲、平野由紀子、森昭彦、打田峻一、崎野滋樹、松澤正夫、野澤道、三神勲、石堂常也、中村妙子、若林玄修、遠藤卓夫、鈴木彰、佐藤百世、前島都雄、久保亮五、増澤利幸、茅野良男、西川恭治、島美喜子、絹川正吉、勝見允行、梅村魁、玉田啓八、林潔、宮崎厚一、一松信、昌谷春海、高橋誠、杉山逸男、那須宗一、村松林太郎、宮腰賢、玉川一郎、永野賢、最上武雄、橋口英俊、藤木宏幸、斎藤幸一郎、平野鉄太郎、大西清、原一雄、山澤逸平、土井恵美子、白川和雄、小林文雄、佐藤毅、市川邦彦、小菅敏夫、望月厚志、高松正昭、五唐勝、松尾弘、高橋和之、井関昇、山科高康、麻島昭一、刈田泰司、安藤英治、板垣雄三、柴田泰比古、太田淳一、瀬部孝、山田良之助、村上千賀子、村井実、福西基、大田末穂、護雅夫、池原義郎、木田宏、丸山眞男、萩原稔、小山五郎、平田道憲、富岡幸雄、西村閑也、米川哲夫、手塚喬介、大泉充郎、高瀬文志郎、池田義人、中島直忠、土橋信男、小倉芳彦、加藤六美、大塚正夫、寺内礼治郎、山口俊夫、石原忠夫、石坂巖、山元洋、向坊隆、鈴木友二、田所光子、富塚文太郎、岡村總吾、永井道雄、春田素夫 (敬称略)

昭和58年度 業務白書

●年間利用者五万五、四七〇人

昭和58年度の宿泊延人数は五万五、四七〇人で、年度当初の目標を上廻り、54年度以来五年連続五万人台を維持することができた。諸経費の増大に対処するため、本年度は三年ぶりに利用料金の一率改訂(宿泊料、食事代とも一日一〇〇円値上げ)を実施したが、右の実績をあげたことは、会員校を中心とする利用者各位のご支持によるもので、心から感謝申し上げます。

なお、これにより開館以来の宿泊利用者延人数は七九万二、一二五人となった。

●利用者別の利用状況

本年度の利用状況を利用者の種別でみると、表1のとおりである。利用の頻度を示すセミ回数によると、全体の六一%が会員校で占められており、非会員校および大学連合を加えると、約八〇%が大学の利用である。学術教育団体と企業等社会人団体は約二〇%であるが、学術教育団体には大学の教師や学生が多数参加しているの増える。ハウスの目的に合致した利用の形態といえるだろう。

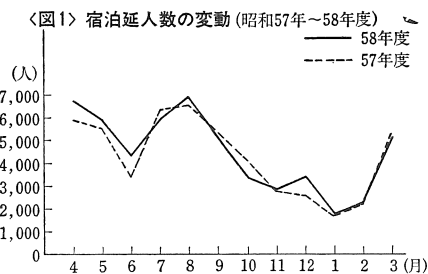
宿泊延人数をみると、会員校(進学会員校を含め計六校)は全体の五四%で、ここ三年連続五〇%を上回った。大学連合には、ハウス主催の大学共同セミナーから「自立」した二つの大学合同セミナーをはじめ、会員校連合の集合同様に、実質的には会員校の利用率はさらに高い。な

〈表1〉利用者別宿泊人数・セミ回数

Table with 5 columns: Category, SeMI returns, Ratio (%), Stayed person count, Ratio (%), Average stay person count. Rows include Members, Non-members, University groups, etc.

〈表2〉月別利用状況

Table with 4 columns: Month, SeMI returns, Stayed person count, Ratio (%). Rows for months 4-3 and averages.



〈表3〉会員校利用状況

Table with 6 columns: Rank, School Name, SeMI returns, Rank, School Name, Stayed person count. Lists 15 member schools.

(注) 1.本表には準協会員校は含まない。2.本表には通信教育スクーリング学生の宿泊数は含まない。

●年間宿舎利用率五七・七%

宿泊延人数を宿舎(収容定員二七〇人)の利用率に換算すると、年間(開館日数三五六日)の平均は五七・七%となる。これは同種の他施設に比べると、かなり高い率といえるようだが、なお一層の向上に努力し、経営の健全化をはかりたい。

●利用者のための

交換プログラム 夕食時の交歓会、季節の諸行事、地元茶道教師一門の奉仕による遠来荘での茶道教室などが、大学の枠をこえた在泊者相互交流の機会として喜ばれてい。外国人の訪日研修グループを迎えた折には、食堂や交友館で国籍をこえた交歓が自然な形で展開される。本年度は三回のプログラムを実施され、一七三グループからの四、四一〇人が参加した。

お、表3は参考までに、会員校大学五六校のうち利用の多かった五校についての利用状況を示したものである。すべての会員校が、自分たち共同のハウスという親近感をもって、より一層広範な活用をされるようお願いしたい。 大学関係の利用の大半は、指導教授を伴った少人数のいわゆるセミ合宿である。宿泊日数では一泊、二泊が圧倒的に多い(本年度は一泊七泊)。他に学科・クラス単位の集會、学内での学際交流を目的とするセミナー、各種課外活動の合宿研修、大学の枠をこえた全国的な研究会など多様である。 春季の新生オリエンテーションも年々その利用実績をあげている。本年度4月7月に実施された新入生合宿(クラス単位以上)は前年度を上回り計五四件(二九校)、延べ六、八七六人(うち教職員五七三人)を数えた。 国際集會では、恒例となった国

際交流基金主催の海外日本語講師研修会(二四ヵ国・五九名)や一橋大外国人研究留學生社会科学基礎セミナー(一九ヵ国・三〇名)に加えて、本年度は米国からの二つの日本(特に「日本式経営」)研究グループの初来泊を迎えたことが特筆される。産業能率大学主催の海外学生訪日研修団(九大学・五一名、一四泊)と国際教育交換協議会主催の米国大学日本研究夏期講座(一大学・一名、四一泊)で、後者についてはハウス(国際プログラム委員会)も「共催団体」として協力した。

特にハウスの利用状況は、大学特有の事情により、図1および表2に示すとおり、季節によって大きく変動する。利用率が平均を回る月(主として年度後半)、週末を除いた平日の利用と、多様な諸施設のより有効な活用を、ハウスの事業に理解ある各方面の団体にぜひお勧めしたい。

● 事業部だより

'84年2・3月
早春のキャンパスから



春を待つ……食堂

立春を境に、セミナーの丘に活気が戻る。一足先に学年末試験を終えた私立大学の合宿が再開されるからである。学生が事実上「春休み」に入るのあたりから学年末3月にかけて、ゼミも課外活動も一年を締めくくる合宿を実施。卒業組は研究の成果を分かち「卒論合宿」などで、学生生活最後の交流の機会を持つ。これに休暇を利用しての語学研修や大学の枠をこえた集会などを加え、ハウスは今年も活況のうちに「年度越し」を利用することができた。2・3両月の利用状況を数字で示すと次のとおりである。なお、3月のグループ数は同月の最多記録である。

| グループ数 | 宿泊延人数 | 定員比 |
|-------|-------|-------|
| 2月 | 九三 | 三、二七八 |
| 3月 | 一二五 | 五、二六八 |
| | | 六三 |

● 学年末の常連セミナーから

この時期は、特に常連グループの来泊が目立つ。そのうち、休暇を利用して今年も三泊以上の合宿

をされたのは、次のとおりである。都立大学生相談室と武蔵大横山ゼミはともにエンカウター・グループ。学芸大の中古文学ゼミと植物系統ゼミ、早大の示村(制御理論)ゼミと大槻ゼミ、青学大の寺東ゼミと羽田ゼミ。そしてとも一年目の専修大望月ゼミと杉野女大田村(教育原理)ゼミ(後者は五泊)などである。

大学院の合宿では、東大「比較文学・比較文化」と東工大「システム・マネジメント・セミナー」ともに一五年以上の常連で、毎年3月中旬の開催である。前者は今年も外国人留学生・研究者を交えてのセミナー。後者は卒業生有志と在校生との交流合宿だが、三年前までは在校生だけの合宿も年二回行なわれていた(9頁に別掲)ので、その実施回数は合計五〇回におよぶ。同セミナーの「育ての親」は現学長の松田武彦先生で、81年学長に就任されたから、3月のこの合宿には必ず参加してこられた。本号の『わたしたちの合宿』では、松田先生にこの合宿セミナーをご紹介していただいた。多彩なサークルの合宿の一つに千葉大医用電子工学研究会がある。「在学中ハウスでの合宿参加合計九回、在泊三六日、食事一〇〇回、お世話になりました。明日は卒業式です」——退館時にそう挨拶された藤本肇氏(現在千葉大附属病院勤務)から、このたび下掲の感想文が寄せられた。

● 早春の交流風景から

雪の多い、長い厳しい冬であったが、食堂、交友館、遠来荘などで、雪の降る日にも心暖まる交歓

雪のなかの衣服

国連大学特別顧問
永井 道雄

ここところ三年、毎年、冬には上智大学の比較文化科の学生たちと、大学セミナー・ハウスを訪れ、二泊三日のセミナーを行なうことができた。

セミナー・ハウスにくるたびに思いだすのは、開館当時のことである。一九六五年七月、開館セミナーが行なわれ、私が委員長とめさせられていたが、東畑精一、貝塚茂樹など多数の先生がたの御指導によって、無事に雨のなかのセミナーを終ることができた。

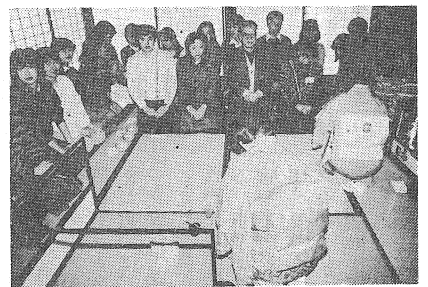
開館セミナーの前後、日本の大学教育の充実をねがって、茅誠

風景が見られた。いくつか拾ってみると——2月4日(土)節分には、夕食時に八グループ計二一六名が交流。開館当初からの利用者、佐藤節子・青学大教授のスピーチのあと、年男(女)たちを中心に元気に豆まきが行なわれた。同日(土)の夕食時には、七グループ計二五七名が交歓、「明日の地球科学を考える会」(二三大学・一四〇名)の原田憲一・山形大助教が同グループの研究の一端を披露された。翌26日(日)の昼食時には国連大学特別顧問・永井道雄氏(上智大比較文化科のゼミ合宿で二泊)がスピーチされ、特に右記「地球科学」グループに、核実験の地球への影響の調査研究計画(米ソ共同提案)への積極的参

司、上代たの、大浜信泉、飯田宗一郎などの諸先生、諸先輩と討議したことをなつかしく思いだす。当時からすでに約二〇年。セミナー・ハウスの建物の数もふえたが、なかでも遠来荘には風情があり、日本の文化の香りを学生にたえらうえて、大きな役割をはたしている。

今年、セミナーのあと、学生たちと一緒に遠来荘をたずね、お茶をいただいた。地域の御婦人がたの御厚意のお茶をいただき、学生たちも、私も、セミナーのあと、雪のなかの遠来荘で、心の安らぎをえることができた。

上智大学の比較文化科の学生は、ながく西洋にくらししたものも多く、それだけに日本の文化をなつかしむ気持ちもよい。セミナーのあとの夕食の席では、一人の女子学生が琵琶(びわ)をかんで、



茶一服を楽しむ永井道雄氏(中央)と学生たち(遠来荘)

赤垣源蔵をうたった。琵琶の音も、衣服の茶も、折からの、ふりしきる雪のなかで、不思議な美しさを感じさせ、私の心のなかのセミナー・ハウスに貴重な一頁を加えたのであった。

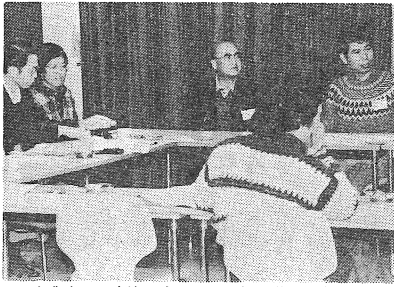
セミナー・ハウスの想い出

千葉大医学部附属病院
放射線科 藤本 肇

医用電子工学(ME)は、いわば工学と医学の接点の領域であり、今後の医療に不可欠な研究分野である。学生のサークルとして結成された千葉大医用電子工学研究会が、初めて当セミナー・ハウスを利用してからは、はや五年が経過した。当時私は二年生であったが、爾来、年に約二回行なわれるセミナーには欠かさず参加した。三泊四日のセミナーが九回であるから、六年間の大学生活のうち、まるまる一ヵ月以上にあたる三六日間を八王子で過ごした計算

になる。その間、大学内では得られない貴重な勉強と体験を積むことができた。また、初めてのセミナーの時、交友館前の広場で行なわれた「夜校コーヒーパーティー」で、他大学の人たちが満開の桜の下で交歓したことなどは忘れぬ思い出の一つである。

現在は、卒業して放射線科の医師として臨床研修を開始したところであるが、専門科の決定にあたっては、このセミナーが重要な動機づけとなった。そして、奇しくも学生生活最後の合宿の翌日に大学の卒業式を迎えることになったが、そんな私にとって、大学セミナー・ハウスはまさに第二のキャンパスなのである。



卒業生との交流を楽しまれる松田学長(中央)
(国際セミナー館)

◆わたしたちの合宿◆ 一八年めのシステム・マネジメント・セミナー

東京工業大学長
松田 武彦

大学セミナー・ハウスで、最初私の研究室だけ、のちに高原・中野両研究室と共同して、卒業生有志と在学生との合宿「システム・マネジメント・セミナー」を開催して、はや一六年、通算して一八年になる。毎年、時期は3月上旬、学部卒業および大学院修了関係の行事が一段落ついた頃である。人数は、平均して五、六〇名というところであろうか。

「システム思考」は、なかなか日常の言葉では表わしにくいので、勢い数式その他の抽象的表現に頼ることになる。それを繰り返して、ついで概念の遊びに陥って、具体性や有用性を欠くことになりがちである。すなわち、システムの表現が論理的にだんだん厳密になり、方法的に一層スマートになるにつれて、内容的には現実を離れて行くおそれが出てくるわけである。

これを防止するためには、時折り世の中の生々しい実態をシステムに注入することが必要で、われわれの合宿では、このことを卒業生に期待するわけである。このため、毎年テーマをきめて——今年めはOA(オフィス・オートメーション)——卒業生が社会や組織の中で経験することを披露してもらって、在学生からいろいろと質問するとか、あるいは逆に、在学生が前以って合宿・討論した内容を発表して、卒業生の側に批判してもらおうとかいう方法を探ることになる。

このほかに、全員を三つか四つのグループに分けて行なう、インフォーマルなディスカッションが、なかなか収穫が大きい。そこでは、いわゆる「建前」ではなくて、「本音」のぶつつけ合いが見られるからである。そして、そのあとの、時に明け方に及ぶ交歓が楽しみで、全体から言おうと、一泊合宿では時間が足りないものであるが、参加者全員がその時間不足の面を意識しているため、かえって充実した討論や意見交換が行なわれるので、これはこれでいいと思つて続けているのである。

画を呼びかけられた。同日午後降りしきる雪に包まれた遠来在内で本年最初の「茶道教室」が開催された。永井道雄氏から、後日この日の模様を綴った一文をお寄せいただいた(8頁)。3月10日(土)の夕食時には一〇グループ計二〇一名が交歓。恒例の合宿で来泊の松田武彦・東工大学長がスピーチをされた。東工大学連合の演劇グループ「星空通信社」は練習中の劇の一景を披露された。同25日(日)の茶道教室には三グループ計一八名が参加した。

●利用状況

* 11月2日 回利用
* 11月3日 回利用
個人利用・日帰り利用者を除く

2月

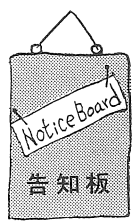
| | | | |
|----------------|-------|--------------------|---------|
| 明星大学助教 | 小川 哲生 | 工学院大学助教 | 加藤 尚武 |
| 中央大学助教 | 池田 正孝 | 早稲田大学助教 | 新澤 雄一 |
| 津田塾大学講師 | 長田 亮介 | 明治学院大学グリークラブ | 阿部興業 |
| 中央大学生生活協同組合 | 佐藤 節子 | 早稲田大学講師 | 日本電気 |
| 青山学院大学文化団体委員会 | 瀬戸岡 紘 | 立教大学学生法律相談室 | 富士土地 |
| 明治学院大学 | 小島 武司 | 武蔵大学体育連合会リーダーズキャンプ | 大沢商会 |
| 共立女子大学マンドリンクラブ | 谷敷 正光 | 工学院大学自然科学研究部 | 油電気工業 |
| 駒沢大学助教 | 野崎 喜嗣 | 上智大学助教 | 保谷レンズ |
| 中央大学助教 | 小島 幸 | 東京学芸大学助教 | 立川スプリング |
| 駒沢大学助教 | 田中 政男 | 東京都立大学助教 | 阿部興業 |
| 武蔵工業大学講師 | 牧野 誠一 | 東京都立大学助教 | 日本電気 |
| 聖心女子大学ESS* | 加藤 豊 | 東京都立大学助教 | |
| 千葉商科大学助教 | 林 義勝 | 立教大学教育ゼミ | |
| 千葉商科大学助教 | | 清泉女子大学講師 | |
| 明星大学助教 | | 横浜商科大学助教 | |
| 明治大学助教 | | 国学院大学助教 | |
| 明治大学助教 | | 和光大学助教 | |
| 法政大学助教 | | 桜美林大学助教 | |
| 明治大学講師 | | 東北大学古生物学教室 | |

3月

| | |
|--------------|-------------------------|
| 女子聖学院短期大学CCF | 厚東 偉介 |
| 東京スクールオブビジネス | 武蔵大学・東京家政大学ジョイントワークショップ |
| 中央大学受験生 | 東京理科大学助教 |
| 全関東学生商業英語連盟 | 駒沢大学助手 |
| 経済地理学執筆会議 | 東京電機大学助教 |
| インド卒論発表研究会 | 安田 寿明 |
| 明日の地球科学を考える会 | 成蹊大文化会リーダーズキャンプ |
| 日本OR学会 | |
| アストン会 | |
| 自由大学連合 | |
| 東京松本英語専門学校 | |
| 全ピーコック労働組合 | |
| 富士電機製造 | |
| アイワールド* | |
| 東芝エンジニアリング | |
| サンウェーブ工業 | |
| 横河ヒューレットパッカー | |
| 全農協労働中央支部 | |
| 富士土地 | |
| ホンダイ販 | |
| 大沢商会 | |
| 油電気工業 | |
| 保谷レンズ | |
| 立川スプリング | |
| 阿部興業 | |
| 日本電気 | |
| | 慶応義塾大学英語会 |
| | 横浜国立大学体育系サークル指導者セミナー |
| | 東京都立大学助教 |
| | 武蔵工大体育会指導者養成講習会 |
| | 東京都立大学歴史研究会 |
| | 慶応義塾大学スピーチ研究会 |
| | 立教大学助教 |
| | 武蔵大学・東京家政大学ジョイントワークショップ |
| | 東京理科大学助教 |
| | 駒沢大学助手 |
| | 東京電機大学助教 |
| | 安田 寿明 |
| | 成蹊大文化会リーダーズキャンプ |

慶応義塾大学助教 岩田 末廣
立教大学物理自主セミナー
東京学芸大学教授 大久保典夫
千葉大学助教 安孫子誠男
国際基督教大学教授 三宅 彰
東京工業大学システム・マネジメ
ント・セミナー
早稲田大学教授 示村悦二郎
千葉商科大学助教 菅沼 憲治
東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄
東京学芸大学教授 小林 弘
慶応義塾大学ビブリオメトリック
研究会
慶応義塾大学心理学同好会
東京薬科大学教授* 坪井 實
一橋大学生協組織部
大妻女子大学講師 宮崎 清孝
立教大学講師 福山 清蔵
成蹊アカデミア
東京学芸大学助教 小町谷照彦
東京学芸大学講師 三笠 乙彦
中央大学講師 小野田昌彦
日本女子大学能楽研究会
法政大学教授 相田 利雄
成蹊大学助教 植村 栄治

東大比較文学・比較文化研究室
東京学芸大学障害児発達科学研究
交流会
早稲田大学理工学部英語会
成城大学源氏物語研究会
学習院大シェイクスピア劇研究会
早稲田大学教授 鳴 武彦
早稲田大学教授 大槻 義彦
中央大学経済学会 金関 寿夫
駒沢大学教授 林 昇一
東京学芸大学生活協同組合
中央大学教授 笠井 貴征
明治学院大学助教 笠井 貴征
千葉大学医用電子工学研究会
早稲田大学ルポルタージュ研究会
中央大学教授* 岩波 一寛
青山学院大学教授 羽田 三郎
東京電機大学学生赤十字奉仕団
中央大学ホテル研究会 兼近 輝雄
早稲田大学教授 木島 淑孝
中央大学教授 神保 信一
明治学院大学助教 市川 深
東京経済大学助教 山本 泰
青山学院大学助教 稲垣富士男
明治学院大学助教 岡田 信弘
明治学院大学旅行研究会
早稲田大学雄弁会
明治学院大ハンドベルリンガーズ
学習院大学社会福祉研究会
慶応義塾大学試験勉強会
東海大学会計研究会 西川 俊作
東京学芸大学助教 杉田 洋
日本大学教授 勝山 進
青山学院大学助教 石川 信男
成城大学教授 中西 進
玉川大学教授 土山 牧民
桜美林大学助教 佐藤東洋士
和光学園生活協同組合 竹林 代嘉
専修大学教授 望月 清司



◆ユング・セミナーのリユニオン

昨年3月に開催された第12回大
学共同セミナー「現代に生きる
C・G・ユング」のBセクション
は、これまで数回の同窓会を開い
ていたが、この3月に、筑波大学
の精神医学研究会と合流して、研
究会を行なった。

幹事役の倉本英彦君(筑波大・
医2)が企画室に「再会記」を寄
せてくれたので、これをもとに
して、少しく紹介しておきたい。

この研究会は、Bセクション
「夢分析の方法」(小川捷之氏指導)
の参加者のうち、筑波大の面々が
中心になって準備を進めてきたも
ので、当日(3月18、19日)は同
大の精神医学研究会のメンバーを

日本ルーテル神学大手話サークル
東京YWCA専門学校
高崎経済大学教授 高瀬 淨
明大付属中野高校硬式野球部
星空通信社
倶楽部ジボジウム
大学生ITCフランス語科
第127回大学共同セミナー
政治経済史学会
心を学ぶ会
日本基督教会時代と宣教に関する
研究委員会
日本ナチュラリスト協会
モラロジー研究所
日本キリスト教団原町教会
東京松本英語専門学校
YFU日本協会*

加えて二〇名が参加した。
主なプログラムは次のようであ
る。()内の氏名は報告者。
①「青年の自殺」(倉本英彦)
「いのちの電話」(得られたケー
スをもとに報告) ②「ユングと
超心理学」(酒井和夫) ③「エン
カウンターグループについて」(稲
川正一) ④「ステューデント・ア
パシー」(稲妻伸一) 卒論を發
表文 ⑤「ユングのタイプ論」(堀
孝文) ⑥「河合隼雄先生の講演を紹
介」。どの発表も時間はいくらあ
っても足りないほど議論が白熱、
夜のコンパには数々の貴重な情報
が交換され、翌二日は筑波学園
都市の見学とレクリエーションが
行なわれた由である。

この研究会の名称を「さいご」と決定し、今後は同種の会合を統
ける。メンバーは臨床心理学、精
神医学の分野の者が多いが、関心
のある人は参加できる。
連絡先 (238) 5-12896 倉本まで。
文学教育研究者集団
日本電気
全そごう労働組合
日本能率協会
エンゼルアソシエーション振興協会
日本水産
富士電機製造
沖電気工業
山村硝子
アクトエンジニアリング
アイワールド*
ヒノキ新業
日本ナチュラリスト協会
石川島播磨重工業
小西六写真工業
京王プラザホテル
パトナー産業

多摩中央信用金庫
スーパリアルプス
カリオン
オリパス光学工業
●編集後記
第127回共同セミナーの講師をさ
れた評論家・粕谷一希氏が「サン
デー毎日」(4月8日号)のサンデ
ー時評にハウスの印象記を書かれ
た。創立の経緯や現名誉館長・飯
田宗一郎氏に触れて、大衆社会の
中で一人一人の人間が自ら人生の
主役であることを確認できるよ
うな舞台装置が必要なこと、そし
てそのモデルの一つがセミナー・
ハウスである、と結んでいる。
花曇りの4月21日、国際文化会
館で三輪(さんりん)学苑の開講
式があった。この学苑の設立者が
飯田宗一郎氏であるため、ハウス
にゆかりの深い学者、財界人、O
Bなどが多数出席して、生涯学習
の場を目指した社会人塾の誕生を
祝福した。各方面で活躍している
OBたちには、待望の企画であっ
たらしい。

学習院大シェイクスピア劇の合
宿でおなじみの荒井良雄教授の最
終講義が、3月24日、目白で行な
われ、編集者が招かれて出席し
た。二二年間の学習院教師生活か
ら、荒井教授は今春、駒沢大学に
移られた。
当ハウスの創立を強く支持され
た森戸辰男先生が、5月29日逝去
された。戦後民主教育の先頭に立
たれた先生の足跡を偲びたい。
本号から、利用者のひろばとし
て「告知板」を設けた。ハウスで
の出会いを契機に学習をつづけて
いる研究会を紹介していきたいと
思う。(能)